

「パイ」される日本

アジアの海賊版から

<2>

山田 奨治

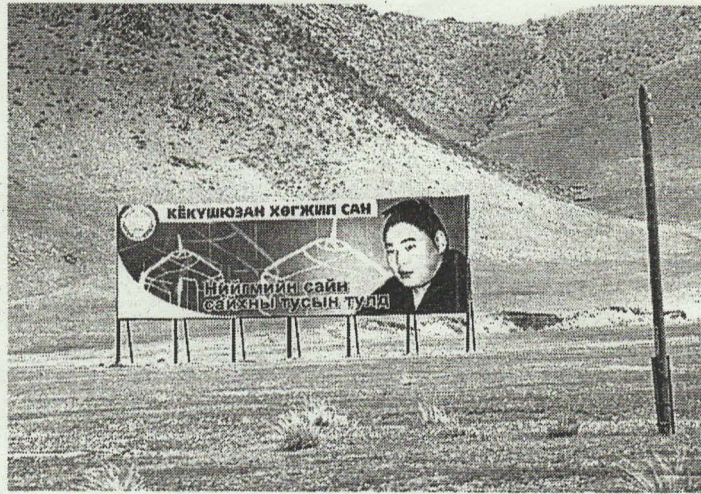
昨年七月にモンゴル国を訪れた。セ氏四〇度近い気温と熱帯のようなスコールのなか、「ナーダム」という国家的なスポーツ祭典の調査をしていたのだが、私の視線は自然と現地に溶け込む日本文化にも注がれた。

電気も水道もないに等しい草原の国だが、首都ウランバートルは別格だ。ケーブルテレビが発達している。築六十年のアパートでも、遊牧民のテントのなかでも、人々は放送を楽しんでいる。ちよつと日本で大相撲の

伝 播

夏場所がはじまったころで、朝青龍や旭鷲山のファンが、ケーブルテレビで流れるNHKの放送にかじりついていた。当地での大相撲の人気は、モンゴル相撲に負けていない。

ホテルの部屋でチャンネルを回していると、日本のアニメが映った。どうやらアニメ専門チャンネルのよう、ディズニーと日本のアニメを交互にやっていた。放映していたのは、「六神合体ゴットマーズとらんま1/2」で、一九八〇—九〇年代はじめの作品だ。音声は日本語のまま、



ウランバートル郊外に立つ大相撲の看板。モンゴルでも日本文化が広がっている

モンゴル語入らないアニメ

字幕も何も入っていない。日本の子どもたちがみている。た番組が、そのままモンゴルでも流れている。

国や台湾ではどこにでもあのような、映像ソフトの海

「クール(かっこいい)・ジャパン」だ「アニメの

一助教授)

ディズニーアニメも同じだった。聞こえる音は英語だけで、やはり字幕も何も無い。おそらく、モンゴル語の吹き替えや字幕を入れるお金がないのだろう。母国語の入っていないアニメを、モンゴルの子どもたちはみているのだ。セリフの意味はわからないかもしれない。しかし、キャラクターの動きをみれば、どんな場面か想像がつく。何よりも、吹き替えがないアニメで、子どもたちは日本語に親しみ、学習する。モンゴルはまだまだ発展途上で、物資が乏しい。中々環境に置かれていない。いまひとつ、大事なことがある。それは、日本のアニメがアメリカのものと並行して放送されていることだ。外国語ばかり聞いていると、その意味を知りたくなるものだ。日本人だって、洋画のセリフや洋楽の歌詞を知りたくて英語を勉強する。外国の言葉や文化を習いたくなるのは、そういう素朴な動機が多い。モンゴルの子どもたちも、今、そんな環境に置かれている。感じているかを知り、そこから生まれる何かを見守ることではないか。灼熱のモンゴルで、そんなことを思った。今優先するべきは、アニメ保護の国策ではない。モンゴルで日本語のアニメをみている子どもたちが何を感しているかを知り、そこから生まれる何かを見守ることではないか。灼熱のモンゴルで、そんなことを思った。

(国際日本文化研究センター)